

記憶と記録

—この十年—

千葉 修

有名スポーツ選手の引退声明で、「記録より記憶に残りたい」云々という言葉を一度ならず耳にしたことがある。その選手名を「記憶」している方も多いと思うが、発言の時期やフレーズのオリジナリティを問い出すと、「記録」を当てる手間が必要となる。

さて、政策研は発足してから7年目、一昔というほどの歴史はないが、研究所の内外の情勢変化の中で、2007年4月における部室制からチーム制への移行、2008年に予定される本所の移転と、現在大きな節目に差し掛かっている。研究所がさらに年輪を重ねれば、まとまった記録も著されるのかもしれないが、最

近記憶力が鶏並に減退しつつある筆者などは、この辺で少し「歩み」を振り返ってみたい気になる。

政策研の前身、農業総合研究所が記念誌『総研五十年』を刊行したのが1996(平成8)年10月、その後約十年間の主要な出来事を思いつくまま、拾い上げてみた。

「トップの交代」

所長の交代は、1997(平成9)年9月、1999(平成11)年1月、2000(平成12)年6月、2003(平成15)年10月、2006(平成18)年8月の5回。ある時代を想起するのに、当時の所長や部長の名前は記憶の呼び水になりやすい。旧総研時代には、所外の人が所長に、理事長、と呼びかけるのを耳にし、研究所への一般的な認識を知らされる思いがした事もあった。

「農林水産大臣の来所」

1999(平成11)年6月、中川大臣が西ヶ原の本所を来訪されたのが、農総研始まって以来の事であった。なお、この年7月には食料・農業・農村基本法が施行されている。

政策研に変わってからは、亀井大臣が2004(平成16)年8月に霞が関分室を視察されている。

「組織・機構の変化」

1996(平成8)年10月、組織再編(研究室の大型化等)。

2001(平成13)年4月、農林水産政策研究所の発足。周知のように同年1月に各省庁の再編、4月に大半の国立の試験研究機関の独立行政法人化がなされた。これに至る過程については、本誌2号(2001年12月)・4号(2002年7月)に篠原所長(当時)が寄稿している。

政策研発足の同年9月、霞が関分室が郵政事業ビルに設置され、2004(平成16)年7月には合同庁舎2号館に移転された。

「北東アジア農政研究フォーラム」

2003(平成15)年10月、日中韓三か国の農業政策研究機関がソウルで創立総会。以降、国際シンポジウムが各国持ち回りで実施され、2005(平成17)年10月には第3回が東京(虎ノ門パストラル)で開催された。

「業務や制度の変化」

2004(平成16)年度、最後の経済関係企画職員研修。

2005(平成17)年6月、メールマガジン「農林水産政策研究所ニュース」創刊。

2005(平成17)年度末、駐村研究員制度の廃止。

他にもいろいろあったはずだが、今よみがえるのは以上のような断片的・偏頗的な記憶でしかない。実は当初、年譜的に各年二、三の出来事を配列できるだろうと考えたが、筆者の視野の狭さのせいもあり、空白の何年(一日ではない)ができることに気がついてやめた。事蹟をフォローすることはそう簡単ではないようだ。記憶は懐古は甘く、記録は回顧は然らずと言っては独善に過ぎようか。

